――二九〇〇単位時間か…
と考えて、×××は思い直した。
――二九〇〇単位時間は、ええと…　三四〇〇時間で、一日が二十四時間だから、ええと…　一四〇日？
脳外補佐はもうないので、肉体に備わった脳細胞だけで計算をしなければならない。あいにくこの肉体は数字向きではないらしく、自分でももどかしいくらい計算に手間取った。
脳外補佐を入れたほうがよかったかもしれない、と後悔したが、もう時間がない。それに長い目で見れば、脳外補佐はないほうがいいに決まっている。なんでも知っていて、どんな計算も一瞬でこなす《人間》がいたら、目立たないわけがない。
できるだけ早く、《地球》のなにもかもに慣れる必要がある。時間感覚も、秒、分、時間、日、週、月、年というスケールで把握できるようにならなければいけない。
――一四〇日は二十週間で、五ヵ月弱で、一年の半分弱。
ほとんどの《人間》は百年も生きられない。《地球》全体では、たいていの《人間》が六十歳を迎える前に死ぬ。ということは、一年の半分弱というのは、ずいぶんな時間になる。
頭を《地球》に慣らしていると、手製の粗雑なスピーカーが粗雑な音をたてた。《人間》が乗れるように、ありあわせのものを使って急いで改造した船なので、いろいろなところが雑にできている。
『郁恵さま、降船のお時間が参りました。計画の変更などがありましたら、今のうちにお申しつけください』
郁恵、郁恵…　自分にその名前を言いきかせる。今日から自分は×××ではなく、高見沢郁恵なのだ。
「ないわ。計画どおりにやって」
『かしこまりました。ではこれから船内の空気を抜きます。以後、音声による情報伝達は不可能になりますが、よろしいですか？』
「オーケー」
『かしこまりました』
たちまち船内の空気が流れ出て、真空になる。
完全に真空になると、これまた手製の粗雑な文字表示器に、
『DOOR OPEN. GOOD LUCK!』

と出た。文字表示器に使われている発光器の数が少なすぎて、英語しか表示できない。
「ほんとに幸運が欲しいよ私ゃ」
×××――郁恵はつぶやいたが、声帯を通る空気が存在しないので、声にはならなかった。
疑似重力はすでに切られている。無重力状態の体を操って体勢を変え、船のドアから外に出た。
一面の星の海と、そのなかに浮かぶ青い星。
変な慣性をつけないように注意しながら、郁恵は慎重に船から手を離した。郁恵単体では転速はできないし、放り投げるものもない。変な慣性をつけてしまったら、《地球》の大気圏に入るまで修正する方法がない。五十時間以上、くるくる回りっぱなしになるのはご免だった。
手を離して数秒後、船は転速した。
慣性の法則を破って、船はなにかを噴射することもなく、ひとりでに郁恵から離れていった。見る間に船は速度を増し、すぐに郁恵の目にはとらえられないほど小さくなった。最終的には光速の九十八パーセントまで加速するはずだ。
船はこれから、来たときの道を逆にたどる。すなわち、五ヶ月弱の間は光速の九十八パーセントで進み、《太陽》の重力から十分逃れたところで転位する。転位した先は恒星の中心だ。船は、ちりひとつ残さず消滅する。
転位は足がつくので、いずれ警察は《地球》のことをつきとめるだろうが、何年も先のことだ。郁恵が《地球》にいるとわかったあとも、《地球》のどこにいるのかをつきとめるのにまたしばらくかかる。それまでには自分の身を安全にできているという自信が、郁恵にはある。
《地球》は、よく目をこらしていればわかるほどの速度で自転している。郁恵は、《地球》のほうを向いて船を離れたので、特になにもしなくても自転の様子がよく見えた。
もし、《人間》の誰かが今の郁恵を見れば、腰を抜かすか、あるいは自分の正気を疑うにちがいない。

アジア系の若い女性がひとり、宇宙服どころか一糸まとわぬ姿で、宇宙空間を平然と漂っているのだから。

＊

学校の制服を着た少女は、ゆっくりと言った。
「結論から申し上げますと、現在までのところ、ショーストッパーは発見されていません。
中程度のエラーが二つ、小程度のエラーが十八、」
机の向こうに座る中年の男が、少女の言葉をさえぎって言う、
「要するに、マスターアップできそう、と。
QAのデータはそちらで管理してください。それよりテスターの評価のほうを」
少女は、銀縁の眼鏡の奥の目をもの言いたげに細めたが、男の言うことに従った。
「総合スコアは平均六十一、標準偏差十二です。これは過去最高のスコアです、といっても比較対象は『レトロスペクティブ』と『サンドワーム』と『タルコフスキー』だけですが。
目立った傾向としては、質問十九『友達にこのゲームを勧めますか？』のスコアが『サンドワーム』並み、つまり総合スコアの改善を反映していません。総合スコアの高さからセールスの好結果を期待することはできないと思われます。
このような傾向が生じた理由ですが――」
少女の説明は五分ほどで終わり、
「評価の詳細は、ベータテスト終了後に報告します」
と締めくくった。
中年の男は数秒間、腕組みして考えこんでから、
「なるほど…　正直はじめは無駄なことをするもんだと思ってましたが、続けてみると、なかなか役に立つ情報が入るもんですな。これでもう少し安くつくなら、言うことはないんですがねえ」
少女は不愉快そうに眉をひそめたが、
「得られる情報の品質と価値をさらに高めるように努力します」
と答えた。

「よろしくお願いします。
ああそうそう――」
こまごまとした事務連絡を交わしてから、少女は社長室を出た。
小さな会社である。社長室といっても、間仕切りで二方を囲んだものにすぎない。一歩出ればそこはオフィスになっている。
少女が出てくるのを待ち構えていたのか、五分刈りの若い男がすぐにやってきて、
「ヴィクのアルファ・ワンが来週の頭です。そろそろ次のマイルストーンを決めないといけませんが、どうしますか？」
「あと十週間ですね。七週間後の頭で行きましょう。達成ラインは九十単位で」
「六週間で九十？　高めですね。新システムですよ？」
「それくらい楽にこなせないようなら、新システムを作った意味がありません。去年、旧システムをこきおろしたのは誰でしたっけ？」
「去年は去年、今は今ですよ。
ま、それはともかく、八十単位で五週間にしませんか？　正月前のほうがいいでしょう、気分的に」
「六週間だとお正月にかかりますか。なら八十単位で五週間にしましょう。
今日のウォークスルーはいつもの時間ですね？」
「はい。お手やわらかにお願いしますよ」

＊

山のなか、森のなか。
朽ちかけた、小さな祠がある。この三十年間、訪うものの一人もいない。
その祠で、彼女は待っていた。
自分の力が、存在が、衰え失せるのを。
彼女は、普通の意味では死ぬことがない。かつて畏れられ、信仰を集め、神として祀られた存在だ。
なぜ自分が消え失せようとしているのか、彼女にはわからない。

彼女の魂は、そんなことを考えるようにはできていない。ただひたすら、感じるままに前に進む。したいことをして、笑いたいときに笑い、泣きたいときに泣く。

いま、彼女にとっての「前」は、自分自身の消滅だった。

＊

高空の薄い空気を切り裂き、高熱を発しながら、郁恵の体は宙を飛んでゆく。その軌道は重力のために曲がり、地球の丸みに沿った緩いカーブを描いている。空気抵抗によって徐々に減速はしているが、飛行速度に比べれば微々たるものだ。

通常の物体なら必ずあるはずの、物体表面からの発光はない。スペクトルを分析すれば、地上からでもこのことがわかるはずだ。

この現象は、《人間》に観測されている可能性もあるが、郁恵はあえてそのことを無視した。《人間》には、一回きりの怪現象を追及している暇はない。それに、《人間》はそういう怪現象を楽しむ性質があるので、《人間》の世界には偽の怪現象の情報が無数にある。郁恵の起こした現象も、無数の偽情報に埋もれて隠れてしまうはずだ。

地表と雲をはるか眼下に見下ろして、あと一時間で着陸、というときだった。

郁恵の脳内に、警報が鳴り響いた。

【着陸システムに異常発生。復旧の見通しは不明】

郁恵はパニックに陥る、その暇もなかった。脳内の警報は続けて、

【対パニック用の保護手続きを発動しました。意識を喪失させます】

言いかえれば、「死ぬかもしれないから安楽死の準備をします」である。着陸には、郁恵自身が手をくだす必要はないから、意識があってもなくても生死には影響ないのだ。

手続きの発動を止める暇も手段もなく、郁恵は意識を失った。

一時間後、郁恵の体は、ある山の山頂近くに衝突した。

地表の土砂その他を爆発的に吹き飛ばし、地面にめりこんで岩盤をたわませる。運動エネルギーのほとんどを失いながらも、岩盤の

弾性によってもう一度郁恵の体は宙に浮いた。そのまま数百メートルを飛翔し、地面に落ちて五、六十メートル転がって、ようやく郁恵の体は止まった。

着陸は成功だった。しかし依然として、郁恵は意識を失ったままである。

＊

冬花（とうか）が家についたときには、時計は八時を回っていた。

東京郊外の駅から、スクーターで走ること二十分の場所に、冬花の家はある。左隣は大企業の保養地、右隣は別の大企業の研修所、お向かいは大学のグラウンドだ。あたりに人家は、まばらどころか、冬花の家ひとつしかない。

このごろ冬花は考えさせられる。いったい父はなにを考えて、こんなところに家を建てたのだろう。変なことの好きな、というより変なことを変と思わない、父らしい選択ではある。父ほどの資産があれば、もっと交通の便のいいところに家を建てられただろうし、それに田舎に建てるにしても住宅地を選ぶのが普通だ。なにを思って、こんなところに――もちろん、考えても答は出ない。冬花の父は半年前に他界した。

家に明かりはなく、そこに建物があることさえわかりにくい。父の存命中には、居候や半居候が何人もいて、明かりのついていない家に帰るということはなかった。最後まで残っていた半居候の小林と亀井も一ヶ月前に去り、いよいよ冬花はひとりぼっちである。

人家が遠いとはいっても街灯はあるし、冬花はスクーターに乗っているので、恐いとはあまり思わない。ただやはり、暗くなってから家に帰ったときには、もの寂しさはひしひしと胸にせまる。それに、冬のスクーターは寒い。悪いことに、この冬は寒さが厳しくて、まだ十一月の半ばなのに真冬のように冷え込む。

――やっぱり、マンション借りて住もうかな。

マンションを借りて住む案は、父が死んだ直後から、後見人の篠塚に強く勧められていることだった。冬花がそれを拒んだのは、この家に愛着があるからだ。

けれど、父の死から半年がすぎた。愛着だけでは暮らしてゆけないことも、冬花はわかりはじめている。
通用門をくぐり、家屋までの五十メートルほどの道をスクーターで走る。これがもし山手線の内側なら豪邸だが、地価の安い田舎である。やたらに広くて不便なだけとしか、冬花には思えない。
その、道の途中だった。
それが目に入った瞬間、冬花はつんのめるほど強くブレーキをかけた。
ぎりぎりのところでスクーターは横転せずにすみ、そしてなにより、それを轢かずにすんだ。
冬花は、スクーターのヘッドライトでそれを照らし、まじまじと観察する。
若い女性が、横たわっている――しかも裸で。
数秒間、冬花は逃げることを考えた。逃げて、電話で警察を呼ぶ。これが一番安全確実な解決法だ。
それをしなかったのは、その女性がまだ生きているように見えたからだった。いまは冬、このまま放置すればすぐに凍死してしまうだろう。
冬花はスクーターを降りて、ヘルメットと手袋を外し、着ていたコートを脱いで女性の体にかける。そっと女性の肩をつかんで揺すり、
「あの、どなたか存じませんが、聞こえますか？　聞こえてますか？」
一応声をかけてみたが、なんの反応もない。
体は暖かい。それも、たった今まで布団のなかにいたような暖かさだった。冬のさなかに、こんなふうに裸で外にいたら、ものの十秒もたたないうちにこんな暖かさは吹っ飛んでしまうだろうに。冬花は首をかしげた。
体をざっと見たかぎりでは、目につく怪我はない。体のなかまではわからないが、見た感じではごく健康で、どこにも怪我はなさそうに思える。
顔をよく見る。歳は二十歳くらいだろうか。顔立ちのきついタイプの美人だ。髪は短い。まるで絵に描いたようにバランスがよくて

魅力的な体型をしている。
とにかく生きている以上、ここに置いておくわけにはいかない。冬花はこの女性の体を、背中にかつごうとした。
が、
「――、！　……」
あまりの重さに持ち上げることもできず、冬花はかつぐのをあきらめた。
意識のない人間の体は重い、とは聞いたことがある。けれど、これほど重いものだとは知らなかった。しかもよく見れば、この女性は明らかに冬花よりも大柄だ。持ち上がらないのも道理である。
しばらく運ぶ方法を考え、結局、家にあった台車（通用門から家屋まで荷物を運ぶのに使っているもの）を持ってきて、なんとか体を乗せて勝手口まで運んだ。勝手口からは、ベッドのシーツを床に広げてその上に乗せ、シーツをずるずるとひっぱって和室まで運んだ。
驚いたことに、この作業のあとも、女性の体は最初と同じく、とても暖かいままだった。風にさらされていた部分ばかりか、地面にじかに触れていた部分までそうだった。まるで魔法だった。
不思議ではあるけれど、とにかく今は布団に寝かせるのが先である。和室に布団を敷き、服を着せるのは後回しにしてまず女性を寝かせた。
慣れない力仕事にきしみをあげる腕を休ませながら、冬花は考える。
まず、警察に電話するかしないか、それが問題だ。なにしろ、あんな目にあっていた人だから、警察が関わってくるのを喜ぶとはかぎらない。
医者を呼んだほうがいい、と同時に思う。素人目には健康そうに見えても、これからどうなるかはわからない。証人という意味でも、すぐにかかりつけの医者を呼んだほうがよさそうだ。
――警察はやめたほうがいいかな。
まず医者を呼んでからのほうが、柔軟な対応をとれる。医者が来てからでも警察は呼べるけれど、いったん警察を呼んだらもう選択肢がない。

なんにしろ、服は着せておいたほうがいい。冬花は、着せる服を探して、押し入れのなかをあちこち見た。家のことはたいてい家政婦に任せきりなので、どこになにがあるのかはよく知らない。
来客用の浴衣が見つかったので、とりあえずはこれを着せることにした。厚手の寝間着があればそのほうがいいのだけれど、そんなものが家にあるのかどうかもわからない。

＊

【全システム、安定稼動条件をクリア】
がばっ、と郁恵は身を起こした。
上のほうに照明灯がある。蛍光灯と呼ばれる、文明化の進んだ地域では一般的な方式だ。油や馬糞ではないので、郁恵は少し安心した。
左右を見回す。どうやら家屋のなからしい。建築様式からいってここは日本、目標地点ぴったりだ。トラブルはあったものの、着陸は基本的にはうまくいったらしい。
そして郁恵は、目下のところ最大かつ緊急の問題に目を向けることにした。
《人間》がすぐそばに一つ――ではなく、一人。
性別は女で、おそらく高校生だろう。学校の制服らしきものを着ている。容姿はどちらかといえば美しい部類に入るが、眼鏡をかけた顔はどこか間が抜けているし、胸はひらべったいし、三つ編みのおさげはあかぬけない。外見は自分のほうが上だ。
歳も外見もこちらのほうが上なので、少し偉そうな態度をとることにする。
「んー、どういったらいいかしらね」
郁恵はとりあえず口を開いてみた。
「察するにあなたは、外で気を失ってた私を見つけて、家のなかに運びこんで、こうやって布団に寝かせてくれたんだと思うけど、当たってる？」
「は、はい」
「お礼言っとくわ。どうもありがと。

じゃ、ちょっと決めて。
選択肢その一、恩返しする。
選択肢その二、私が何者で、どうして裸で外に転がってたのかを説明する。
選択肢その三、とっとと立ち去る。
どうする？」
《人間》は面食らったような表情をしている。
もっともらしい演技をすれば驚かせずにすむのだろう。そのかわり怪しまれる。警察を呼ばれると厄介なので、驚いてもらうことにした。
しばらくしてから《人間》は答えた、
「…複数回答はありですか？」
この《人間》は、間が抜けたような顔のわりに、適応能力は高いらしい。鋭いところを突いてきた。
「ありだよ。ただし順番はよく考えてね。当然、三は最後だから、一が先か二が先か」
「その前にまず、服を着てください」
《人間》は、そばに置いてあった浴衣をさしだした。郁恵はそれを着ながら、
「ありがとう。ほんと、サービスいいよねー。こんな変な奴相手にさ」
「なにもしないつもりなら、最初から警察を呼んでました。それに、服を着ていただかないと目のやり場に困ります。サービスじゃありません」
眉を寄せて目をそらし、あまり意味のないことを言う様子は、まるで言い訳をしているようだった。こんな変な奴を家にあげたことを少し後悔して、自分に言い訳しているのかもしれない。
「で、最初はなにがいい？」
「事情の説明をお願いします」
「説明ね。
私はね、実は、いわゆる宇宙人なのよ」
《人間》は冷たい表情をした。
「あ、信じてないね。いま証拠を見せたげるわ」

郁恵は、手のひらのなかから、長さ一メートルの竹竿を取り出してみせた。《地球》の科学技術ではとても真似できないことのはずだ。
自分の見ていることが信じられない、信じたくないようなふくれっ顔をしている《人間》に向かって、郁恵は言う、
「魔法じゃないよ。タネも仕掛けもあるんだから。宇宙人ならではの仕掛けがね」
「どうして宇宙人が浴衣の着方を知ってるんですか？」
「そりゃタネと仕掛けよ」
「どういうタネと仕掛けですか？」
売り言葉に買い言葉で、郁恵はその仕掛けを説明しようとした。が、数秒間、そのまま凍りついてしまう。脳外補佐がないので、説明できないのだ。
「確かに、あなたにはなにか特別なところがあると思います。自分のことを宇宙人だというのも、あなたなりの考えと理由があってのことかもしれません。でもそれなら、自分の事情を話すだなんて言わないでください。私もあえて訊こうとは思いませんから」
はっきりと不機嫌そうに《人間》は言った。
郁恵は反射的に言い返す、
「あ？　恩を売ってもらったからって嘘つきよばわりされる筋合いはないね。
じゃ、あんたさ、江戸時代の人間にインターネットの仕組み説明できる？　情報理論だのチューリング・マシンだの半導体だの論理ゲートだのパケットだのルーティングだの、全部説明できる？　電磁気学も量子力学も全部！　あんた一人で、下準備も参考書もなしに？」
《人間》は一瞬、できる、と言いたげな表情をした。この《人間》はよほどコンピュータに詳しい上、かなりの負けず嫌いらしい。普通なら迷うこともできないはずだ。
「それは……できませんけど」
それでも《人間》は、ぜんぜん納得していない、という顔をしている。大量に《地球》の知識を見せたので、かえって疑惑を深めてしまったらしい。
無理に押してもしかたない。郁恵は話を先に進めることにした。

「わかればいいのよ、わかれば。
なんで私がこんなとこに来たかっていうと、ちょっと警察に追われててね。つかまるとヤバいもんだから、ここで死ぬまでおとなしく暮らそうかって思ったわけよ。
そういう暮らしをしてるかぎり警察は容疑者をつかまえない、っていう法律があってね。残りの命は短くなるけど、つかまるよりマシだし、逃げまわるより楽しそうだし」
「『かぐや姫』ですか？」
「そんな話もあったっけ。でもあれは流罪だよ。…って、嘘つけばいいのか。流罪ってのは本人が言ってるだけだから」
「詳しいですね。日本語もうまいし、浴衣も知ってるし、地球のことならなんでも知ってるみたいに見えます」
「そりゃね、死ぬまでここで暮らそうっていうんだから、知識は多いに越したことはないわ」
「どうして宇宙人が人間の姿をしてるんですか？」
「そういうふうに作り変えたからよ。たとえばさ、人間の姿のままでハチの巣で暮らせる？　姿を変えなきゃ無理でしょ」
「作り変える？」
「《人間》だってちょっとはやってるじゃない。顔の整形手術とか」
問答するうちに、この《人間》も少しは納得したらしく、露骨に疑わしそうな顔はしなくなった。
「……今までのお話をまとめると、あなたは宇宙人で、逃走中の犯罪者で、人間に化けて地球に逃げこんだんですね？」
「そうそう」
「戸籍も知り合いもなくて、それに服もなくて、困るとは思わなかったんですか？」
「戸籍も知り合いもない人なんてたくさんいるじゃない。服は、ほら」
郁恵は手のひらからブラウスを一枚出してみせた。
《人間》はうなずいた。
「わかりました。あなたが宇宙人だというのは本当だと思います。よろしければお名前を教えてください。私は清家（せいけ）冬花です」
「高見沢郁恵。地球ではね。元の名前は、表現する方法がないか

ら言えないわ」
「それじゃあ、高見沢さん、恩返しというのは何ですか？」
「えー、なにがいい？　宿題の手伝いとかだと私もありがたいんだけど」
《人間》は露骨に嫌そうな顔をした。そういえば、宇宙人に宿題の手伝いをしてもらっても、嬉しくもなんともないだろう。どうも頭がまだ、《地球》のものの考え方に慣れきっていない。
「そうですね…」
それでも一応考えるふりをするあたり、気弱な性格らしい。負けず嫌いで気弱。損しそうな性格だと高見沢は思った。
と、そのときだった。
「おお、これは珍しいものがおるわい」
高価な鈴を鳴らすような、名手の奏でる楽器の音のような、美しい声だった。
郁恵と冬花はお互いに顔を見合わせた。
「…今の、なに？」
「なんだか、天井のほうから聞こえてきませんでした？」
二人はそろって天井を見上げた。